

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鎚木町 198-3
電話 (043) 485-1801

桜の咲くころ----- 吉崎 隆 東京ウオーターフロントの旅路 加藤 孝一
豚もおだてりゃ...下町糸ちゃんエッセーのセ 岩井 糸子 74歳のラブレター----- 内田 節

佐倉で蘇った農耕民族の営み

前田 幸博

佐倉に移り住んで20余年、引越して間もなく畑を始めた。当時はまだ現役であったので、もっぱら、日曜大工ならぬ「日曜菜園」で、休日の僅かな時間を割いての畑作業であった。仕事は忙しく、徹夜やホテル泊も珍しくなく、帰れない日は家族に協力してもらった。生き馬の眼を抜く競争社会で疲れた身体と心に、自然と触れ合うひと時は一服の清涼剤であった。それでも、自分で作った野菜は新鮮で実に美味しく、家族から絶賛された事を想い出す。

四季折々の野菜に挑戦し、上手くいったり失敗したり、その都度栽培のコツを勉強していった。落花生の翌年に蚕豆を植えて連作障害。確かに落花生は、食べては固い殻を剥くとマメが現れるが、その名の通り、花が落ち土中に潜り殻を作る。まさかマメ科とは思わなかった。大玉トマトを植えては、梅雨を過ぎると途端に元気がなくなる。大玉トマトに雨水は禁物なのである。今では、ビニールテントを張って防いでいる。

今年の夏、トマト、ナスは元より他12種類の実物類、根菜類、葉物類を植えた。個性が違う野菜の世話は大変である。寝る前に翌朝の段取りを練ると眠れなくなることもあるが、夏は日の出とともに観察に行く毎日である。こうして収穫した野菜も夫婦二人では食べきれず、近所、知り合いにおすそ分け。異口同音に「新鮮で美味しかったです」の言葉が励みになる。

ここ3年、玉葱の根元に白カビが発生して株が太らない。過去の栽培状況を振り返ってみた。我が菜園は「自然循環

農法」で、生ごみや枯葉で堆肥を作り、もみ殻をたっぷりすき込む。化成肥料は一切使わない。土壌に問題はない。前年とは違った畝に栽培している。連作障害とは思えない。肥料成分も鉄、マンガンなど微量元素も問題ない。玉葱の産地を思い浮かべてみた。北海道、淡路島、佐賀、千葉県では白子など。砂地や重土の土地である。ただ、共通している事は、水はけ方法に工夫が施されていることである。ここ数年、耕した後簡単に整地して植えこんでいた。「低畝」が原因なのである。他所の玉葱は頗る元気で大きい。確かに5センチ以上は高い。

野菜作りは奥が深い。同時に自然相手に根気がいる作業でもある。農家の苦労は図り知れないものがある。飽きっぽい自分がこんなに長く続けられているのは、眠っていた農耕民族の魂が復活したからであろうか。

(編集委員)

桜の咲くころ

チューリップ畑で賑わうサイクリングロードを小径車の自転車で漕ぎ抜けるとどこまでも続く桜並木が満開となり、印旛沼も快晴の空を映し限りなく広くさわやかな朝となる。秘密の抜け道からオフロードで田圃が順番を待つ一本道の広いあぜ道に身を置く。もうすぐ小竹谷津である。冷たい森の空気が顔に当たる。

今日は11年目の山崎一夫さんの米作り体験初日で種まきである。すでに5年生の赤と白のキャップ達が勢ぞろいしていた。井野の「辻切り」を飾ってある一本の大きな百歳を超える桜の木の下に山崎さんの家はある。近くの丘陵の緑は夏に向けて毎日その色を変えると言う。田畑の上流にはもともと湧水池があったがそこも田圃になり今は地下水を汲み上げている。今でも春には大きなノビルやヨモギが

土手に茂る。すでにコシヒカリの種籾は温湯消毒後、浸水して発芽を促す「浸種」、風呂場で発芽を促す「催芽」までは山崎さんの経験による作業である。いよいよ本日4月9日「播種」種まきだ。種を蒔くのは育苗箱。小学生が持てるくらい薄い小箱に土を入れてタツプリの水をかけ種籾をまんべんなく播き土を入れる。このサンドイッチの箱をいくつも運んで屋外の育苗シートの中に挟み、湿りの調整をする。30日ぐらいで若葉が三枚出る5月13日頃に田植えとなる。その前に田圃の水面を作る代掻きがある。「モノ」づくりは、作品が形になっていく「時の流れ」と、人の経験による作業がうまく絡み合わないと良いものではない。子供たちには伝わっていきはすだ。風が過ぎると満開の桜の下でまだ土の田圃に花びらはらはらと一時舞う。

(城内町 吉崎 隆)

東京ウオーター

フロントの旅路

令和が初まる直前の3月、幸運にもカレッジ25期生2組の皆様に行ける機会を得て、豊洲市場・東京湾クルージングの旅をしました。

豊洲市場では、新市場の巨大な建物や最新の設備・機材を見学しました。昭和52年頃の築地支店勤務時代、毎朝入場した築地市場の仲買・仲卸の方の心遣いを思い出しました。暮れの魚河岸では、一本丸ごとのハマチやマグロの大きな塊を頂き、「やっちゃ場」(青果市場)では、当時では珍しいキウイを御馳走になり、江戸っ子気質のきつぷの良さに触れたひと時でありました。東京湾クルージングでは、皇室や賓客も乗船される視察船「新東京丸」に30年ぶり乗船しました。竹芝ふ頭を出港しレインボーブリッジに差し掛かる頃、窓越しに林立するビルを見ながら、かつて東京

臨海副都心開発に関わった時代が彷彿と甦ってきました。

この副都心は、東京都で7番目の開発と新しく、台場、有明、青海に跨る東京ドーム94個分と最も広い副都心です。平成元年頃、民活導入により東京都の出資する第三セクターが設立されインフラ整備が計画されました。出向した私は21世紀の大都市がいかにあるべきかを提示する都市博のお手伝い、それは、平成8年開催予定であった「世界都市博覧会」でした。諸般の事情から無念にも中止となりましたが、オリンピックの一部会場として来年日の目を見ます。場として来年日の目を見ます。あれこれと頭を巡らせる間に船は竹芝ふ頭に帰港しました。東京ウオーターフロントへの小旅行ではありましたが、昭和と平成を回顧し令和の明日を予感させる感慨深くも素晴らしい旅となりました。

(宮ノ台 加藤 孝一)

豚もおだてりや：

下町糸ちゃん

エッセーのセ

ごろごろ　ごろごろ　一億
円　落ちてないかな？　ごろ
ごろ　ごろごろ　珍しく何も
予定のない一日は　そうだ！
京都市こう！　いつのCM？
そうだ！　佐倉市立中央公民
館のIさんに頼まれていた事
があった。

市民カレッジに4年間通い、
そして卒業してからも何度か
足を運ぶ事がありました。そ
の都度公民館でお世話になっ
たIさんにお会いすると、「下
町糸ちゃん　又書いて下さい。
好評で」？　そのうちに原稿
用紙をにこにこ笑顔と共に渡
されました。流石、毎日のよ
うに年配の方々と接している
ので、年寄りの扱いが上手で
す。私の短めの足が木の根元
に、少し動き始めました。け
れど何も浮かんできません。
市民カレッジ在学中は、『な
かま』に4回投稿し、4回載

せて頂きひとり悦に入ってい
ました。そして極めつけは3
年生の授業の際に、情報大学
の先生が見えました。講義が

終わってから、私は臆面もな
く自分の書いたものを、手渡
し読んでもらいました。短い
文なので、直ぐに目を通して
くれて、開口一番「これで
す！　今の若い人達に伝えた
い事は」と。先生が帰られて
から、その時担任だった宮鍋

先生が教室に戻り「皆さん、
岩井さんの原稿を授業に使う
と、情報大学の先生が持つて
いきました」。クラスの皆さん
の拍手の中、私は必死に木に
登り、こけた事は言うまでも
ありません。

明けて猪、今や人生百年と
か、病院でのあるある。
「高齢と加齢で事は済み　白
衣の背中　パソコン打つのみ」
こけないように！　パソコ
ンに負けないように！

(上座　岩井　糸子)

74歳のラブレター

もぐ、今でも大好きだよ。

もぐがいらないと何も出来な
いおいらなのさ。なのに、も
ぐに言われると怒ってばかり
のおいらなのさ。しょうがな
いおいらなのさ。わかっってい
るけどダメなおいらなのさ。

今だって、町内会長たって
ほとんどもぐがやってくれて
るから出来ているのさ。なの
に、さも自分でやっていると
勘違いしているのさ。本町
の人達に一目置いてもらって
るのも、もぐと結婚して本町
に連れて来て貰ったからさ。

なのに、おいら、もぐに、
どれほどの幸せをあげられて
いるのだろうか？　ごめんな
さい！　安い給料だったのに、
こんなに大きな家に住めるの

も、もぐのおかげ。感謝して
も感謝しきれないほどの幸せ
を有難うございます。結婚し
て46年色々あったけど、今で

も、もぐの事、大好きだよ。

おいらの自慢の女房だよ。綺
麗で、頭もおいらより何十倍
もいいし、もぐは、ウソって、
言うかもしれないけれど、そ

れはおいらのもぐへの愛情表
現不足だよ。だったら、ご
めんなさい。前にも言ったけ
ど、おいらもぐと結婚して
本当に本当に幸せになれたん
だよ。なのに、もぐには何も
してやっけないな。おいら、
どうしたらいいのだろうか。

これからも色々あると思う
けど、おいら、もぐの事ずつ
とずっと愛し続けるし、大事
にするよ。もぐは信じないか
も知れないけどね。もぐに言
われて怒ったりするのは、愛
情表現の裏返しなので許して
下さい。もぐに甘えたいんだ
よ。甘えん坊のおいらがいる
のさ。

俺の大事なひさ子さんへ

ぶおとこで持てない男

節より

(大蛇町　内田　節)

7月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「趣味」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL: 043-485-1801 FAX: 043-485-1803

〒285-0025 佐倉市鏑木町 198-3

E-mail: chuo-public@city.sakura.lg.jp

URL: http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

『なかま』は佐倉市民カレッジの学生と卒業生で構成される編集委員が編集を行っています。

さくら道

平成も最後となる4月の終わりに、我が家の愛犬アカが急に旅立った。様子がおかしくなっただけか10日後の事だった。1才の時甚大寺の金毘羅市でもらってきて12年いた犬であった。朝夕の散歩は妻の役目で、たまに私が連れていき、2人共できない時はシルバーの方をお願いしていた。

皆にかわいがられて尻尾を振っていた姿も今は無く、淋しさを

ひとしおである。入れ替わりに小さな黒いノラ猫が住みついていて、残った犬のエサを食べている。

妻は犬のアカに対して、クロと名付けたようである。思えば私も子供の頃ノラ犬を飼い、長年住んだ市川ではノラ猫を20年飼い、娘達にもかわいがられた。最後は目が見えなくなりどこかに消えてしまったが…。動物とは縁が切れないようである。

(東上床 健二)

あとがき

令和元年5月に「佐倉市民カレッジ」3年生に進級し、編集委員としても、3年目をむかえました。

毎回、文才の無い自分を恥じながらの、編集会議への参加でした。

日本語の美しさ、難しさを、つくづくと考えさせられながら、投稿文を読ませていただいています。

その人にしか書けないことを、人に伝えることのお手伝いが私にできているのか、と自問自答の2年間でした。今では、私にとって編集会議は、編集委員の方々も助けていただきながら、楽しくも貴重な国語の時間となっています。

今年も編集委員としての私を成長させてくれる、たくさんの皆様の投稿文と、巡り合えるのを楽しみにしています。

(野崎 恵子)